トピックス

乳児観の変遷

松　島　暢　志

みなさんは赤ちゃんにどのようなイメージを持っているでしょうか。ある人にとってはかわいい存在でしょうし、別の人にとっては自らを癒してくれる存在かもしれません。反対に、煩わしい存在と思う人も中にはいるでしょう。このような赤ちゃんに対する見方を「乳児観」と言います。もちろん、この乳児観は人それぞれ異なりますが、時代によっても、優勢な見方は変化してきました。教育学でも「子ども観」という言葉で議論されることが多いですが、ここでは発達心理学の視点から、乳児観がどのように変わってきたのかを解説します。

かつては主流で、そして実は現在でも多くの人が無意識に抱いているものが「無能な乳児観」です。確かに人間の乳児は非常に無力です。産まれたばかりでは自力で移動ができないどころか、寝返りすらできません。視力も悪いですし、言葉を発することもできませんし、栄養摂取も自力ではできません。そのため、保護し、養育する大人の存在が非常に重要になります。17世紀の哲学者ロック（Locke, J.）が、子どもは観念を持たない状態で産まれるとした「白紙説」は、この無能な乳児観を代表する考えの一つです。日本でも江戸時代の儒学者の荻生徂徠が「七歳までは智も力もなき」と書き残しており、かつては洋の東西を問わず、乳児の無力性に焦点が当てられていたのだと思います。そして乳児を「かわいい」、「お世話をしたい」と考えるのも、乳児を未熟な大人とみなす、この乳児観を反映していると言えます。

この、長らく続いていた無能な乳児観が大きく変わったのが、1960年代からです。発達心理学の分野で、乳児を対象にした実験方法が開発され、それによって乳児の能力を調べることが可能になりました。そして数多くの実験から、乳児は私たちが考えていた以上に、大人のような、時には大人以上の能力が存在することが分かり、「有能な乳児観」と変化していきました。例えば、生後数日で見知らぬ女性の声より母親の声を好んだり、数の区別ができたり、「１＋１＝２」という原理を理解したりすることが明らかになっています（もちろん数字が読めて計算しているわけではありません）。また、一般的な日本人の大人にとって英語の「L」と「R」の発音を区別することはとても難しいですが、生後６ヶ月頃の日本人の赤ちゃんは、その区別を簡単にやってのけます（とはいえ、そのまま何もしないと９ヶ月頃には区別できなくなりますが）。

しかし、この乳児を“小さな大人”と考える乳児観では、乳児の有能さが強調されすぎているのではないかという批判も生まれてきました。また、大人と同じ能力を乳児の中に探そうとすることで、大人の能力と同じ結果が出ると「乳児はすごい！」、大人と異なる結果が出ると「乳児は未熟！」という安易に二極論の考え方になってしまうこともあります。私たち子どもの発達に関わる者は、「大人中心主義」の考え方から脱却し、子どもは直線的に大人のようになるのではなく、大人と異なった子どもなりのモノの見方をする、と考えるようにしていくことが求められています。

〈引用・参考文献〉

森口祐介「おさなごころを科学する　進化する乳児観」，新曜社，2014年